

日本語形容表現の意味 : 情報提供という観点からの考察

著者	草薙 裕
雑誌名	文藝言語研究. 言語篇
巻	2
ページ	89-110
発行年	1978-03
その他のタイトル	Semantics of Japanese Adjectival Expressions : A Consideration from the Communicative Point of View
URL	http://hdl.handle.net/2241/13527

日本語形容表現の意味

——情報提供という観点からの考察——

草 薙 裕

1. はじめに

1960年代の前半にチョムスキーが文の「文法性」の問題を提起して以来、¹⁾ アメリカの言語学、特に生成文法では、統語論と意味論が極度に接近した。文法の深層構造、表面構造から意味解釈を分けることを主張する(意味解釈理論の)チョムスキーでも下位範ちゅう化規則 (subcategorization rule) や文脈依存規則 (context-sensitive rule) などに意味的要素が多分に入っている。²⁾ ましてや、生成文法のもう一派の生成意味論にいたっては、意味論と統語論の区別までなくしてしまっている。³⁾

生成文法の目的は、「特定言語の母国語話者が、適格 (well-formed) と見なすような文のみを生成し (generate) 適格でない文は生成しないようにしくみ (device)」⁴⁾ ではあるが、いまのところまだ文の分析の段階を脱していない。しかし、言語が用いられる状況を考慮しない限り、文の適格性を見きわめるのは困難な場合が出て来る。たとえば、

(1) ? 彼はうれしかった。

という文は、普通の会話では非常に不自然である。ところが、これに類する文は小説の中ではよく出て来る。また、普通の会話でも、

(2) 彼はうれしかったんだ。

という表現はよく用いられる。こういった問題を統語論中心に考えると、非常に複雑な規則が必要になる。まして、

(3) ? 机が歩く。

¹⁾ たとえば、チョムスキー (1961)。

²⁾ チョムスキー (1965)。

³⁾ レイコフ (1970) など。

⁴⁾ 安井 (1975)、192 頁。

(4) 机が歩きだしたような気がした。

(5) 机が歩けたらなあ

などの例を見てみると、(3)の「机が歩く」が非常に不自然であるため、下位範ちゅう化規則をもうけたとしたら、(4)や(5)の適格性を認める規則はどうなるであろうか。われわれはある時には意味をなさない文でも、他の状況下では、意味をなすという了解が話し手と聞き手の間で成立する限り、ごく自然に用いているのではないだろうか。

要するに、言語が用いられる状況と言語の意味とは密接な関係があると考えられる。そうだとすれば、言語の意味を言語使用の状況、すなわち、意志伝達(コミュニケーション)の立場、さらにいいかえれば、どういう情報がどのように提供されるかという観点から研究することにより、言語の本質がよりの確に究明できるのではないだろうか。したがって、その結果が真に母国語話者の内在的言語能力(intrinsic competence)を正しく描き出しているならば、他の言語記述より、チョムスキーのいう記述的妥当性を有していることになる。⁵⁾

本稿は、意味論における組織的解明が、言語記述の記述的妥当性を高めることを示すために、現代日本語の形容表現の意味的分析を試みるものである。ここでいう形容表現とは、形容詞、形容動詞、および動詞に助動詞の「～したい」などのついたものの総称を意味する。

2. 情報提供者

形容表現は、普通、物の形容、いいかえれば、物の状態を表わす。したがって、物の状態を表現する場合に、どういう条件が必要かということから見てみる。

言語の主要目的である意志の伝達になされる時、そこに絶対に必要なものは、話し手、聞き手、および伝達内容である。⁶⁾ この話し手と聞き手は、意志の伝達においては、話し手が意志伝達をなし、聞き手がその意志伝達を受けるという両端に存在するのはもちろんであるが、言語表現では、この二つが非常に似た要素を持っている。たとえば、

(6) A. 私は行きます。

B. あなたは行きます。

⁵⁾ チョムスキー(1965)。

⁶⁾ もちろん意志伝達の場合も重要な要素であるが、本稿の論旨とは直接関係をもたないから、一応はぶくことにする。

- (7) A. あなたは行きますか。
B. 私は行きますか。
- (8) A. 私はうれしいです。
B. あなたはうれしいです。
- (9) A. あなたはうれしいですか。
B. 私はうれしいですか。

において、平叙文には「私」(話し手)がすっきりおさまる表現 ((6 A), (8 A)) には、実際の情報伝達という観点からは、「あなた」(聞き手)がおさまりにくい ((6 B), (8 B))。特に (8 B) のような形容表現の場合は、仮に文法的には問題はないとしても、実際の意志伝達という観点からは、意味をなさない。ただ (6 B) の場合は、聞き手の意志に関係なく、というより、むしろ話し手の意志が働いて、聞き手が「行く」のだということを伝える意味では、このような表現が使われないとはいえない。(しかし、この場合も「あなたが行くことになっています」とか「あなたは行くんですよ」といった表現の方がずっと自然である。)

逆に、疑問文の場合は「あなた」の方は自然だが ((7 A), (9 A))、「私」の方が不自然になる ((7 B), (9 B))。(8 B) 同様、(9 B) は、意志伝達の観点からは、全く無意味である。(7 B) も、(6 B) 同様、普通には意味をなしにくい。(これも、話し手が「行く」かどうかを、聞き手の意志として聞く場合に用いられるかもしれないが、これも「私は行くのですか」といった表現の方が自然である。)

したがって、実際の情報(インフォメーション)の提供という意味では、平叙文における話し手(「私」)と疑問文における聞き手(「あなた」)は文中において同じ働きをするといえると思う。これを情報提供者と名づけ、同時にその反対の立場にあるもの、すなわち、疑問文における話し手(「私」)と平叙文における聞き手(「あなた」)を情報受領者とする、第一表のような関係が成り立つ。

第 一 表

	情 報 提 供 者	情 報 受 理 者
平 叙 文	話 し 手	聞 き 手
疑 問 文	聞 き 手	話 し 手

この観点からすると、「私」とか「あなた」が入った文は、これらの語が入っていない文とは異質のものであるといえるかもしれない。たとえば、

- (10) 私は行く。

- (11) 彼は行く。
- (12) あなたは行きますか。
- (13) 彼は行きますか。

において、(11) は「彼」が「行く」ということのみを述べているのに対し、(10) は「は格」に「私」という情報提供者が介入していることで、「行く」というのが情報提供者の意志であるという可能性が出て来る。(12) も (13) も同様のことがいえる。さらに、情報提供者が入るか入らないかで用法が異なる顕著なものは、

- (14) A. 私は行きたい。
B. 私はうれしい。
- (15) A. ? 彼は行きたい。
B. ? 彼はうれしい
- (16) A. あなたは行きたいですか。
B. あなたはうれしいですか。
- (17) A. ? 彼は行きたいですか。
B. ? 彼はうれしいですか。

における「～したい」や「うれしい」のような形容表現である。これらの表現は、普通、情報提供者に関する限り用いられるのであり、情報提供者以外の人間の記述には用いられない。したがって、実際の意志伝達において情報提供者という概念が非常に重要な要素になっているのである。⁷⁾

では、形容表現の中でこの情報提供者がいかなる役割をはたしているかを見ると、それぞれの形容表現によって、この役割が異なることがわかる。ここで、情報提供者が形容表現の中ではたす役割、すなわち、情報提供者が文の中で、形容表現のなににあたるか、によって形容表現を分類してみる。

なお、くわしい形容詞の分類の研究には西尾 (1972) がある。これは大量の用例を文学作品その他からとり、形容詞の意味と用法を客観的に記述しようとした研究の成果であり、大きく評価できると思う。本稿は、西尾の批判として生まれたものではなく、日本語の形容詞の意味と用法という観点から分類するという同じ目的を持ちながら、全く異なったレベルや方法で行ったものである。

ここで、西尾と本稿の相違点を簡単に述べておこう。まず、西尾は、用例か

⁷⁾ 遂行的分析 (performative analysis) においては、通常の平叙文における第一人称のはたす役割に大きな意義が与えられているが、本稿でいう情報提供者とは、情報提供というもっと大きな立場で見た場合の概念である、ロス (1970) 参照。

ら出発して、それを分類するという、帰納的方法を用いているのに対し、本稿は演えき的方法を用い、構文的特徴を考慮しつつ分類を行なったものである。ただ本稿に用いた資料は筆者の主観的なものであり、⁸⁾ 西尾の様に、客観的に「採集」されたものではなく、また数においてもはるかに制限されている。その意味で本稿はまだ試論の域を脱していない。証明は今後の課題である。

第二に、西尾は「用法」を形容詞が形容するものまたはことという立場で見ている。したがって、形容詞の分類も、形容されるものやことの分類だと解釈できる。これに対し、本稿は「用法」をいかなる情報伝達の状態で用いられるかという観点でとらえた。したがって、いろいろな情報伝達の場面における構文的性質が大きな手がかりとなっている。すなわち、西尾は、形容詞がどのようなものを形容するか、という観点でおさえている点、語彙的レベルでの考察であるのに対し、本稿は、形容表現を用いる場合、話し手がいかに情報を得るか、を考えるという点で、認知レベルでの考察だといえる。したがって、方法論の相違はともかくとしても、この二つの研究はレベルが全く異なっているわけである。

3. 観察形容表現

まず、次の文をみていただきたい。

- (18) この花は赤い。
- (19) あの山は高い。
- (20) あのこはきれいだ。

この「赤い」、「高い」、「きれいだ」などの表現は、いわばなにかの外観を形容する意味を持つ。すなわち、情報提供者がなにかを観察した上で、その観察結果の報告という形で情報を提供する。したがって、この種の形容表現を観察形容表現と名づけよう。

この観察形容表現の特徴は、情報提供者が文中にあらわれることがまれだということだ。たとえば、

- (21) A. ? 私はこの花が赤い。
B. ? 私にはこの花が赤い。
- (22) A. ? 私はあの山が高い。
B. ? 私にはあの山が高い。

⁸⁾ 西尾は、主観にもとづく記述が不完全であつたり誤りが少くないから、大量の用例による客観的記述の方法をとった、としている (p. 7)。

(23) A. ? 私はあのこがきれいだ。

B. ? 私にはあのこがきれいだ。

はどれをとってもすっきりしない。(ただし、(22 B) は「私にはあの山は高すぎる」という意味では使われるかも知れないが、その場合の「私」は観察者ではない。) ただ、(21 B), (22 B), (23 B) は、「私にはそう見える」という意味で日常用いられないことはない。もちろん「見える」がついた表現は全く問題がない⁹⁾。

(24) 私にはこの花は赤く見える。

(25) 私にはあの山は高く見える。

(26) 私にはあのこはきれいに見える。

観察者が情報提供者と異なる場合はどうだろうか。(21), (22), (23) の「私」を「彼」にかえた場合、「私」以上に不自然である。「私」がすっきり入る (24), (25), (26) の表現も、「私」を「彼」にかえると、やや抵抗が出てくる。これは、情報提供者が観察者でない場合、観察結果をそのまま伝えるのではなく、観察者と情報提供者との間で観察結果が情報として伝えられているわけで、ここでいう情報提供者にとっては、二次的な情報であるからなのだろう。二次的情報は、後述するように、「そうだ」というような表現を使うことで、それが二次的情報だと明記するか、「らしい」とか「～そうだ」というような表現で、それが情報提供者の推定であると明記するのが普通である。

4. 比較形容表現

観察形容表現の中には、常に何かと比べて表現するものがある。たとえば、

(27) あの山は高い。

(28) 新幹線は早い。

(29) この湯はぬるい。

などの表現を考えると、どれも絶対的なものではない。(27) は、たとえば、ある地方の山が頭の中にある情報提供者は、その中の「高い」山を「あの山は高い」というだろう。しかし、同時に富士山を思い浮かべれば、(27) の表現は成り立たなくなる。その富士山について述べる場合も、エベレストの山が頭にあ

⁹⁾ ただ、観察が必ずしも目からのものとは限らない。たとえば耳からの観察(この場合厳密には観察ということばは適切ではないかもしれないが)の場合もありうる。たとえば、

この音楽は美しい。

れば、「低い山」になるかもしれない。(28) も当然、新幹線以外の汽車と比較した表現であり、飛行機に比べれば、普通は「遅く」なる。(29) も何を基準にするかで違ってくる。たとえば、インスタント・コーヒーを入れるためのお湯というなら、60度のお湯は「ぬるい」が、同じお湯でも、それが風呂の湯であれば、「あつい」はずだ。

要するに、これらの表現は、情報提供者がなんらかの条件を考慮に入れて、その基準で形容表現を選んでいるわけである。その意味では、これらの形容表現は主観的だといえそうだが、ここでの条件は情報提供者の外に本来存在するもので、その条件を情報提供者が完全に消化しているとは考えられない。したがって、これらの表現は、だれかが条件を検討すれば、情報の真疑が立証されるはずである。¹⁰⁾ この種の表現を比較形容表現と名づけることにする。

この比較形容表現は観察形容表現の一種であるから、情報提供者はあまり文中に現われない。(22 A) の例でふれたが、

(30) 私にはこのお湯はぬるい。

(31) 私にはこの室は狭い。

といった表現が可能である。しかし、この「私」を第三者の「彼」におきかえて、

(32) 彼にはこのお湯はぬるい。

(33) 彼にはこの室は狭い。

としてもおかしくない。これは情報提供者である「私」の主観がなんらかの役割をはたしているのではなく、(30) や (31) における「私」がたまたま、その表現の条件の中に介入している客観的存在であるにすぎない。こういう例はほかにもあるわけで、

(34) 私はあした二十歳になる。

といった表現は、情報提供者の「私」が文中に入っているが、主観の意志のようなものは入っておらず、あくまでも記述される客体であるわけだ。

比較形容表現は、前にも述べた様に、条件を検討することで、その真疑が立証されるわけであるから、情報提供者の真の主観で表現が左右されるものではない。したがって「私」が記述される客体にならない限り、情報提供者が文中には現われないものである。この表現は比較という操作が常に存在するので、ほとんど例外なく、高い—低い、早い—遅い、あつい—ぬるい、というように

¹⁰⁾ 文の真疑の立証性の有無を指摘したのはハヤカワ (1963) である。

基準の上、下を表わす対になっている。

5. 判断形容表現

比較形容表現の真疑が立証できるのに対して、立証不可能な観察形容表現がある。たとえば、

(35) この本はおもしろい。

(36) 彼女は美しい。

(37) 彼は英語が上手だ。

(38) このドレスはいい。

などの表現は、比較形容表現同様、おもしろい一つまらない、美しい一きたない、上手だ一下手だ、いい一悪い、の様に対になっている。また、なにかの基準と照らし合わせて、表現するところも似ている。ところが、比較形容表現における情報提供者が、実際に表現しようとするものと、客観的な基準を比較する単なる比較者であるのに対し、(35), (36), (37), (38) のような表現においては、その基準が全く情報提供者個々のものであり、その基準をはっきり客観的に表わすことは不可能に近い。たとえば、

(39) この本はおもしろい。

(40) この本は大きい。

を比べてみよう。一つの本を前に置き、だれかがこの本に関して記述する。(40) の表現に対して、

(41) この本は小さい。

という表現も出てくるかも知れないが、それぞれの人が何を頭においているかわかれば納得がいき、基準をそろえれば、全員一致で (40) か (41) の表現にまとまるはずである。これに対して、(39) の表現は必ずしも意見の一致を見るとは限らない。たとえば、本が二冊あり、その一方について述べる場合、

(42) この本の方が大きい。

(43) この本の方がおもしろい。

というようにいえるが、比較形容表現である「大きい」の方は、そこにいる人すべてが一方をさして (42) の表現を使うはずだ。ところが「おもしろい」は、そこにいるすべての人が一方を「おもしろい」とするとは限らず、他方を「おもしろい」とする人もいるかもしれない。これは前にも述べた通り「おもしろい」、「美しい」、「上手だ」、「いい」などの表現が情報提供者の主観的な判断の

結果を表わすためである。

これらの表現を判断形容表現と名づける。この種の表現は、なんらかの意味で善悪のいずれかを示唆しているようだ。

判断形容表現も、比較形容表現同様、文中に情報提供者があらわれることが少ない。これは、比較形容表現の場合と全く逆の理由で当然といえる。すなわち、判断形容表現においては、情報提供者が観察者であると同時に、主観的判断を下す。したがって判断は情報提供者のものであるのが普通であるから、わざわざ第三者と区別する必要がないのであるまいか。

6. 記述形容表現

観察形容表現は、情報提供者がなにかを観察した上で、その観察結果の報告という形で情報を提供するものであることは、前に述べた通りだが、この観察形容表現の中に、本来比較を主な働きとしないものがある。たとえば、

(44) この花は赤い。

(45) このテーブルは丸い。

などは、物の色や形をいい表わすものである。これらの表現はそうかそうでないかということが問題になるので、程度をうんぬんするものではない。したがって、

(46) この花はあの花より赤い。

(47) このテーブルはあのテーブルより丸い。

というような表現は本来不自然なもののような気がする。ただ、(46) のような表現は「赤」の要素が多い、という意味には使われるだろう。また (47) も、「円」と「だ円」との比較には用いられるかも知れない。¹¹⁾ しかし、この種の形容表現の特徴が、比較形容表現や判断形容表現と違い、高い—低い、とか、いい—悪い、というような対照を表わす対がないことからこれが前記二種の観察形容表現とは異なっている。この種の表現を記述形容表現と名づける。

¹¹⁾ 形容表現の中には、本来の意味をこえて、類推的に用いられる場合がある。

(1) 彼の顔は僕のより赤い。

(2) 山田は中村より人間が丸い。

(3) 彼が来なかったのが良かった。

というようにいい方は通常使われているのと違った意味を持つ。意味論での記述である限り、違う意味は同じ言語形式を持っていても違う表現と考えなければならないだろう。

記述形容表現では、情報提供者は、何かを観察し、その色や形を記述することによって情報提供をする機能をはたすだけである。したがって、この記述形容表現は比較形容表現以上に客観的な表現といえるだろうし、表現の真疑が立証されるのはいうまでもない。

また、ある種の動詞に「ている」や「てある」がついたもの、たとえば、

- (48) 戸があいている。
- (49) 戸があけてある。
- (50) 山がそびえている。
- (51) 道が曲っている。

のような表現を形容表現とみなすか、どうかは議論の余地があるが、形容表現だとすれば、当然、記述形容表現だといえる。

7. 感覚形容表現

比較、判断、記述の各形容表現は観察形容表現に入るが、それ以外の種類の表現がいくつかある。判断形容表現同様、表現の真疑が立証しにくいものに、情報提供者の感覚を表わすものがある。たとえば、

- (52) 私は頭がいたい。
- (53) とてもねむい。
- (54) 私はとても寒い。
- (55) ひもじい。

などは情報提供者の生理的現象を表わす表現である。したがって、情報提供者のみが知っていることであり、外から客観的に見ることができない。だから、これらの表現は、そのまま次の様に第三者の生理的現象を表現するのは不自然である。

- (56) ? 彼は頭がいたい。
- (57) ? 彼はねむい。
- (58) ? 彼はとても寒い。
- (59) ? 彼はひもじい。

これらの表現は、「らしい」とか「のだ」をつけたり、動詞にして「がっている」という表現を用いるのが普通である。

これらの形容表現を感覚形容表現と名づけよう。感覚形容表現は情報提供者の生理現象、したがって内部の状態を表わす表現であるが、主観、すなわち、

情報提供者の気持を表わすものではない。この点、判断形容表現や次の感情形容表現とは異なる。感覚形容表現の文には、よく情報提供者の「私」がともなうが、表現しているものが、情報提供者の体内の状態であるところから、この「私」は主観のために出るのではなく、むしろ情報としての客体として出ているものといえるだろう。

8. 感情形容表現

最も主観的な形容表現は、人間の感情を表わす表現であろう。たとえば、

- (60) 私はうれしい。
- (61) 私はさびしい。
- (62) 私は本が読みたい。
- (63) 私は本がほしい。

などにおいては、情報提供者が、自分の気持を表わしたものである。¹²⁾ 人間の気持というものは、その人間自身にしかわからない。したがって、限られた例外以外は、自分以外の人の気持ちはわからない。

- (64) ? 彼はうれしい。
- (65) ? 彼はさびしい。
- (66) ? 彼は本がほしい。
- (67) ? 彼は本が読みたい。

(64)~(67) のような表現がほとんど使われないのは、他人(「彼」)の気持がほとうに、たとえば、「うれしい」のか、そうでないのか、知るよしもないからであり、こういう感情を表わす形容表現が第三者に関して用いられる場合は、それが、その人の動作に現われたものを観察したことを報告するか(「うれしがっている」とか「さびしがっている」)、または情報提供者の推定によるものであるという表現にするか、あるいは、表現が主観によるものであることを示すのが普通であることは後述する通りである。

この種の形容表現を感情形容表現と名づける。

この感情形容表現に関して注目すべきことは、(64)~(67) のように、「彼」のような第三者が文中に現われるのは通常まれであるが、小説の中ではよく用い

¹²⁾ 時枝 (1941) は構文の意味の違いに関連して (p. 374)、

甲 色が赤い。川が深い。

乙 水がほしい。母が恋しい。

における甲、乙の区別を指摘し、乙は「主観的な情意の表現」としている。

られる。したがって、たとえば感情形容表現の形容詞が第三人称の名詞、代名詞とは結ばれないというような文法規則では、実際の言語現象を生成することができない。ここに情報提供者という意志伝達上の概念の設定に意義が現われる。情報提供者が知ることができる感情をそのまま表わすのが感情形容表現であると考えることができるわけで、通常の会話などでは、情報提供者は当然第一人称の「私」（肯定文の場合）、および第二人称の「あなた」（疑問文の場合）であるわけであるが、小説の場合は、表面上は情報提供には関係ない第三者も、小説全体の情報提供者である作者の創造した人物であり、その人物の感情は作者が一番知っていることになる。したがって、これも「情報提供者の知ることができる感情」に入るわけである。

感情形容表現は、小説のような場合は別として、通常、(60)～(63)で見られるように、情報提供者である「私」が文中に現われる。ただ、

(68) この道はさびしい。

(69) 旅行はたのしい。

のような表現は、情報提供者が文中に出ないばかりか、気持ちより描写であるような感を受ける。しかし、これも、

(70) ? だれにでもこの道はさびしい

(71) ? だれにでも旅行はたのしい

というような表現が抵抗なく使えるだろうが、さらに、

(72) ? この道は彼にはさびしいが、私にはさびしくない。

(73) ? 旅行は彼にはたのしいが、私にはたのしくない。

も、どこかおかしい気がする。ところが、

(74) この道は私にはさびしいが、彼にはさびしくないようだ。

(75) 旅行は私にはたのしいが、彼にはたのしくないようだ。

とすれば、抵抗がないことは、やはり (68) や (69) のような客観的に見える表現も、主観的な情報提供者の感情を表わしているといえるのではないだろうか。

9. 嗜好形容表現

最後に、気持ちを表わすという点においては感情形容表現と同じであるが、やや異質のものがある。たとえば、

(76) 私は寿司が好きだ。

(77) 私は野球がきらいだ。

のような表現である。これらの表現が感情形容表現と異なる点は、それが半恒久的な状態を表現していることにある。これを感情形容表現の中の似た意味を持つものにとくらべると、

(78) 私は寿司がほしい。

(79) 私は野球はいやだ。

(76) と (78) は「私」は「寿司が好ましい」、また、(77) と (79) は「野球が好ましくない」、という点で、それぞれ、同じであるが、(78) と (79) はある限られた時点における状態を表現するのに対し、(76) と (77) は少なくともかなり長い間、原則的には、恒久的にその状態が続くことを意味する。しかも、この違いは、文法表現にはっきり現われる。(78) の表現は第三者の感情をいう場合に、

(80) ? 彼は寿司がほしい。

(81) ? 彼は野球はいやだ。

とそのまま現われることはまれであるのに対し、「好き」、「きらい」は、

(82) 彼は寿司が好きだ。

(83) 彼は野球がきらいだ。

とそのまま用いられる。これは、同じような感情を表わす表現でも、それが性質上、恒久的なもので、なんらかの経験を通じて、第三者の「好き」、「きらい」がわかってくる。一度わかれば、それが変ることが少ないから、そのまま表現してもおかしくない、ということになるのではないだろうか。この表現を感情形容表現と区別して、嗜好形容表現と名づける。

10. 表現の主観性

これまでに、各形容表現について、情報提供者がはたす役割によって分類をこころみた。以下、これらの分類がはたして適当なものかどうかを見るために、これらのグループの意味をさらに考えつつ、これらのグループがいろいろな状況でどういう行動をするか、また、それがグループの意味とどういう関連をもつかをみてみたい。

形容表現の分類にあたって、その表現が主観的なものか客観的なものかを論じてきた。この主観性というものが、はたしてどんなものか、を見るため、表

現がはっきり情報提供者の主観であることを表わすと思われる「～と思う」という表現を各形容表現につけてみよう。

まず記述形容表現では、

(84) この花は赤い。

(85) この花は赤いと思う。

「この花」を目の前にしている時は、まず (84) の表現を用いる。(85) の表現は観察不可能の場合に用いられる。

比較形容表現では、

(86) あの山は高い。

(87) あの山は高いと思う。

「と思う」のついた (87) の表現も、つかない (86) の表現も用いられるが、(87) の方は、おそらく、なんらかの基準との比較に情報提供者が自信がない時に使うのではあるまいか。

判断形容表現の場合は、

(88) この本はいい。

(89) この本はいいと思う。

の (88) と (89) は両方とも同じ状況で用い、しかも差はほとんどない。ということとは、この判断形容表現は、あくまでも主観的表現だといえる。感覚形容表現の場合、

(90) 私は頭がいたい。

(91) ? 私は頭がいたいと思う。

情報提供者の感覚なら、(90) が自然で、(91) の表現はまず使わない。これは、情報提供者が自分の感覚を記述するわけで、その間には、主観(思考的な意味での)は入らない。これは記述形容表現の観察に同様の主観が入らないのと同じである。

感情形容表現では、

(92) うれしい。

(93) うれしいと思う。

において、(92) の方がより多く用いられるようだが、(93) の表現も使われる。もちろん意味の違いは全くない。ということとは、判断形容表現同様、これも主観的な表現だといえる。

嗜好形容表現においては、

(94) すしが好きだ。

(95) すしが好きだと思う。

情報提供者がはっきり情報を持っている場合は、(94) を、情報がたしかでない場合は (95) を用いる。

11. 推 定

これまでは情報提供者が情報を確実につかみ得る場合を中心に考えてきた。この項では、情報提供者が確実な情報が入手困難な場合を考えてみよう。確実な情報がない場合、手持ちの情報からなにかを推定 (inference) することが行なわれる。

各種形容表現が推定として用いられるのは (もちろん、推定を示す表現とともに)、どういう状況かを考えてみよう。

まず、記述、比較形容表現は、当然、観察が不可能である場合、すなわち、目の前に、観察されるものがないか、それに関する情報が不足している場合である。たとえば、

(96) この木の花は赤そうだ。

(97) この汽車は早そうだ。

において、(96) は「花」が実際に目の前にある場合の表現としてはおかしい。(97) も走っている汽車に対するコメントではあり得ない。汽車が目の前にあっても、比較すべきもの (この場合は汽車の速度) に関する情報が不足しているわけである。

同様に、判断形容表現も判断を下すものに関する情報が不足していれば推定の表現を用いるのが普通である。

(98) あの本はおもしろそうだ。

(99) その人はよさそうだ。

(98) は、たとえば、まだ本を読んでいない場合、(99) は「その人」をまだよく知らない場合、などが考えられるが、この判断形容表現が、前の記述、比較形容表現と違う点は、仮に断定を下すことができると考えられる情報が入手されていても、推定の表現を用いる場合が、多々あるように思われる。この判断形容表現が情報提供者の判断という典型的な主観を表わすものであってみれば、その判断を下すにたる情報がそろっているか、いないかも当然、主観の問題と

なる。

次に、感覚、感情形容表現の場合は、情報が人間の内部に存在するため、情報提供者自身のものであれば推定はおかしいし、それ以外のものであれば断定はおかしい。したがって、

- (100) A. 私は手がいたい。
B. ? 彼は手がいたい。
- (101) A. ? 私は手がいたそうさ。
B. 彼は手がいたそうさ。
- (102) A. 私はかなしい。
B. ? 彼はかなしい。
- (103) A. ? 私はかなしそうさ。
B. 彼はかなしそうさ。

というように、情報提供者自身と第三者に関して述べる場合には、断定と推定の関係が逆になる。また、嗜好形容表現がこれらの表現と違うのは、第三者に関しても断定が使えるという点にある。

12. 認知作用の違い

今までにいろいろな形容表現を表現の意味から見てきたが、¹³⁾ まとめとして、実世界の現象を観察してから、それを言語表現に記号化するまでの過程を通して、それぞれの形容表現がいかに違うかを見てみたい。この言語の記号化の前の過程を認知作用と呼ぶが、これについては、他で論じているので、¹⁴⁾ ここで

¹³⁾ 西尾 (1972) の分類と本稿の分類を対照するといろいろおもしろい点が出てくる。西尾は形容詞を感情の主体か性質、状態などの主体のいずれかをとることでそれぞれ感情形容詞と属性形容詞にわけ、さらに次のように下位分類を行っている。

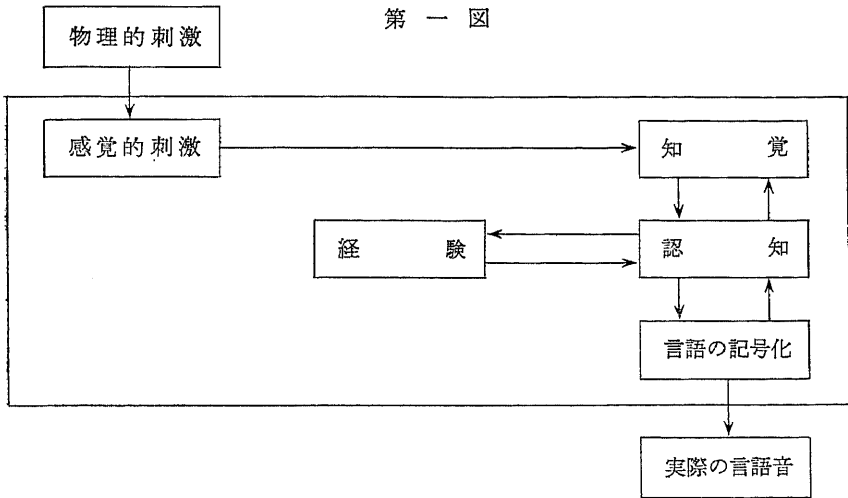
感情	感情
	感覚
属性	広汎なもの
	もの
	ひと
	こと

本稿の嗜好形容詞表現が西尾では感情形容詞として、特に区分されていないことや、本稿の観察形容表現と西尾の属性形容詞の異同はともかくとして、興味深いのは、味やにおいを表わす形容詞が西尾では属性形容詞に、本稿では感覚形容詞表現に分類されている。また、ひとの性質に関するものの中には西尾の属性形容詞と本稿の感情形容表現にまたがっているものが多い。くわしい論議ははぶくが、西尾と本稿は相対立するものではなく、違ったレベルの分析として、相補うものではないかと思われる。

¹⁴⁾ 草薙 (1975)。

は簡単にまとめる。

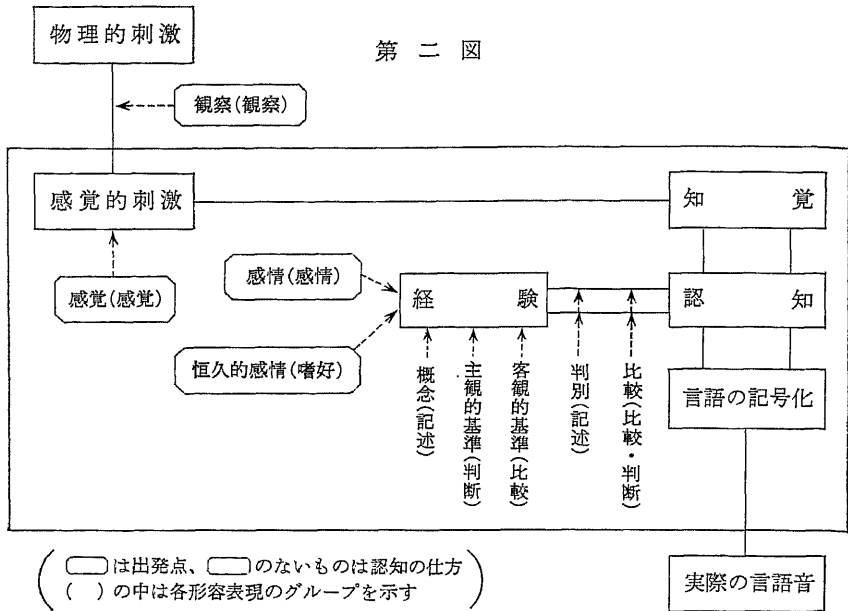
実世界の現象は、物理的刺激として人間の頭脳に入るが、入ったものは感覚的刺激となる。そして、この感覚的刺激が大腦の感覚中枢に伝達されるが、これは、単なる刺激の伝達ではなく、他の感覚中枢や言語中枢の影響を受けたものである。そして、人間の刺激に対する解釈は常に過去の経験や知識や思考の活動を受けたものになる。これを図示すると第一図のようになる。



また、本稿で分類した形容表現が、この認知作用において、どういう経過をたどるか、それぞれについて見たのが第二図である。

まず、観察形容表現は、実世界の現象を物理的刺激として「観察」することからはじまる。観察形容表現は物理的刺激を表現したものであるといえる。もちろん、観察されたものが、刺激として大腦に伝わり、そこで認知が行なわれるが、同じ観察形容表現でも、その細分化されたグループにより、認知のされ方が違ってくる。まず、記述形容表現の場合には、経験の中におさめられた概念、たとえば「赤い」とか「丸い」とか、の判別 (identification) がなされる。

これに対し、比較および判断形容表現の場合は、経験の中に、情報提供者独自の基準があり、この基準との比較により、言語記号 (表現) が決定される。ただ、比較形容表現と判断形容表現の違いは、前者の基準が客観的に論議でき、その表現の真疑が証明できるのに対し、後者の場合は、基準が情報提供者独自



のものであり、比較が客観的に根拠があるものではなく、全く主観的になされるものである。

感覚形容表現は、普通、物理的刺激が存在せず、感覚そのものが、感覚的刺激として、情報提供者の体内に存在するわけである。そして、それが認知される段階では記述形容表現と同じく、判別という形で行なわれる。

感情形容表現の場合は、感覚的刺激も存在せず、認知のみが行なわれる。すなわち、感情というものが大腦の中で起り、これが、記号化されるわけである。また嗜好形容表現の場合は、この感情が恒久的に経験の中に存在するわけで、一時的に存在する感情を表現する感情形容表現との違いがある。

なお、感覚形容表現において、物理的刺激が存在しない、また、感情形容表現において、物理的および感覚的刺激が存在しないというのは、たとえば、感覚形容表現の「いたい」という感覚が物理的刺激として体内に入ったり、感情形容表現の「うれしい」が物理的、感覚的刺激として伝わるものではないということであり、それらを引き出す要因が刺激として伝わらないということではない。たとえば、「棒でぶたれる」という物理的刺激が「いたい」という感覚

的刺激を起こしたり、「入学試験の発表における自分の名前」といった物理的刺激が感覚的刺激になり、「うれしい」という認知になったりする。しかし、花を見た時、「赤い」とか、山を見た時、「高い」とかがでてくる認知は、物理的刺激そのものを直接表現するのであるのに対し、「棒でぶたれる」とか「入試の名前」と「いたい」とか「うれしい」などの表現はむしろ間接的に因果関係で結ばれていると見られる。

第二図は形容表現の基本的操作を図示したものであるが、それと同時に、この図は形容表現の基本的用法（形容表現をそのまま使う用法のことで、「らしい」とか「のだ」とか「と思う」などがついた形容表現は含まない）を示唆している。すなわち、(一)観察形容表現は物理的刺激が直接観察されなければならない。したがって、直接に物理的刺激が観察できない場合は推定その他の表現を用いる。(二)感覚、感情形容表現は情報提供者の体内に発するもののみに用いる。したがって、情報提供者以外のものの体内にあるものには、推定その他の表現を用いなければならない。(三)嗜好形容表現は、恒久的性質から、一つの事実のようになり、情報提供者の経験として存在し得るため、そのまま用いられる。

その場、その場の状況から、これらに対する例外が可能な場合が考えられる。前記のように、感情形容表現が小説の中でそのまま第三者の感情を表わすのも一つの例である。これは感情形容表現だけに限らず感覚形容表現の例もある。情報提供者が医者である場合、患者を診察して、その感覚的刺激を、ある情報の形で認知することができる場合があるかもしれない。たとえば、患者のおなかをおさえて、

(104) これはいたい。

という場合が考えられる。これは感覚的刺激が通常他人には認知できないという前提の例外となるわけである。

13. 「のだ」という表現

「のだ」（および、「んだ」、「のです」など、それに類する表現）は特筆に値すると思う。今までの論述の例で？をつけた、通常用いられない表現や用いられることが疑問視される表現に、この「のだ」およびその類型をつけたら、使用可能になる。たとえば、

(105) ? 彼はねむたい。

(106) ? 彼は寒い。

(107) ? 彼はかなしい。

(108) ? 彼は行きたい。

などは通常使われない。ところが、これに「んだ」をつければ、

(109) 彼はねむたいんだ。

(110) 彼は寒いんだ。

(111) 彼はかなしいんだ。

(112) 彼は行きたいんだ。

となり、すべての表現が可能になる。そればかりか、推定のような表現しかゆるされないような状況、たとえば、花のつぼみを見て、

(113) この木の花は赤そうだ。

とか、とまっている汽車を見て、

(114) この汽車は早そうだ。

などの表現を使う場面でも、

(115) この木の花は赤いんだ。

(116) この汽車は早いんだ。

などの表現が用いられる。

この「のだ」に関して林大は次のようにいっている。¹⁵⁾

ノ(ダ)は、説明用、説得用のことばである。現実描写ではなくて、現場の事実について根拠とか理由とかを述べる。またその場になことを相手にわからせようとする...

この説明中、「その場になこと」と「現実描写ではな」というのは、前記の例文の説明に有力である。すなわち、実世界の現象(物理的的刺激)が存在しない、したがって、感覚的刺激の認知が行なわれない場合、(105)~(108)の表現はできない。「花」が目の前になかったり、汽車が走っていない場合、

(117) この木の花は赤い

(118) この汽車は早い

のような表現はおかしい。これに対し、第三者の感覚や感情、目の前に具体的に存在しないものに関するコメントは、

(一) 目の前にあり観察できる関連現象から推定する(「~そうだ」のような推

¹⁵⁾ 林(1964), p. 286.

定表現)、

(二) その表現が、情報提供者の全く主観的なコメントだと(このコメントに根拠があろうと、なかろうと)ことわる(「と思う」というような表現)、

(三) あらかじめ情報提供者が知識として、その経験の中に保存していることを表現する。

のどれかでなければならない。¹⁶⁾「のだ」に類する表現は、この(三)の場合にあてはまると考えていいだろう。(二)も(三)も情報提供者の認知作用の結果にちがいないが、(二)の認知は主観的、すなわち、情報提供者の個人に属するものであるのに対し、(三)は、同じ様な認知によるが、これは経験の中に、より客観的なものの、極言すれば、情報提供者の主観では左右されない事がらがおさめられ、それが認知作用で表現に出てくると考えられる。このことは、たとえば、物の値段に驚いた観光客が、

(119) ハワイは物価が高いね。

と表現すれば、ハワイに住んでいる人間は、

(120) その通り。ハワイは物価が高いんだ。

と答えるであろう。これは動詞の表現の

(121) どこへ行きますか。

(122) どこへ行くんですか。

の違いにも共通していると思う。「のだ」のない(119)は驚き、(121)は情報提供者の意志を問題にするのに対し、「のだ」のある(120)と(122)の文は了解がすでにあったり、すでに決まっていることに対する論述であったり、質問であったりするわけである。一口に言って、「のだ」やそれに類する表現は、情報提供者の主観を消去する働きを持っているといえるのではないだろうか。

14. おわりに

こうして見てくると、第三者がある形容表現の主格にはならないというような、一見、文法的特徴ないしは語彙的特徴だと思えるものが、形容表現の文法

¹⁶⁾ 英語に関する限り、ここにあげた制約は形容表現にあてはまらない。したがって、
I am happy.

と同様、

He is happy.

という表現が通常使われている。

的あるいは語彙的行動というより、各形容表現の情報提供上の本質的意味による、すなわち、どういう認知が行なわれるか、による制約によることであることが明らかになった。したがって、実際の意志伝達場で、なんらかの状況の影響によって、その制約がとれれば、通常用いられないはずの表現が実際に使われることになる。したがって、これを文法規則の中でとりあつかったとしたら、非文法的な表現が実際に使われることになるし、しかも、母国語話者が、その表現はおかしい、非文法的である、という意識がなければ、その文法規則は生成文法として不合格になる。

この現象を意味論の中であつかうことによって、たとえば、「直接の情報が入手可能」とか、「判断」、「比較」などの認知の行なわれ方などを意味論の単位として用いれば、状況の変化にも対応できるし、どういう文法表現をどういう場面で使うかという文法の表面現象も説明が付き、冒頭で述べた文法理論の記述的妥当性を高めることになるのではなかろうか。

参 考 文 献

- Chomsky, Noam (チョムスキー), "Some Methodological Remarks on Generative Grammar" *Word*, 17, 219-39 (1961).
 ———, *Aspects of the Theory of Syntax*. 1965.
 Hayakawa, S. I. (ハヤカワ), *Language in Thought and Action*, 1963.
 林大「ダとナノダ」『講座現代語(第六巻)——口語文法の問題点』1964.
 藤村靖「意味と文法」『国語学』第92集(1973).
 草薙裕「言語活動における認知作用——意味論における一仮説——」『言語の科学』第6号(1975).
 Lakoff, George (レイコフ), *Irregularity in Syntax*, 1970.
 Leech, Geoffrey (リーチ), *Semantics*, 1974.
 西尾寅弥『形容詞の意味・用法の記述的研究』1972.
 Ross, John Robert (ロス), "On Declarative Sentences" in R. A. Jacobs & P. S. Rosenbaum (eds.), *Readings in English Transformational Grammar*, 1970.
 時枝誠記『国語学原論』1941.
 安井稔(編)『新言語学辞典』(改訂増補版) 1975.